公文学習の学習改革とその後…

1　はじめに

本園で 2007 年に導入を始めた公文学習(公文の教材には算数・数学，英語，国語があり，本園では算数・数学を導入)。2018 年 10 月より重点支援を受け学習改革を行なった。公文学習を通し，基礎学力の定着や向上だけでなく子ども達の傷ついた自尊感情を回復させ，「自分はやったらできる！」という自信や自己肯定感を育てるために，子ども達を褒め育てることを目的とし，また，職員の褒める力のスキルアップの向上を図った。複数の職員から毎日プラスの言葉のシャワーをかけ続けたことで子ども達，そして職員はどのように変わっていったか，公文担当が学習改革のために行なった覚悟と準備，全職員の協力体制，そして子ども達の頑張ってきたことをまとめた。

2　公文式学習とは（KUMON 公式 HP より引用）

解き方が分かるのではなく，自分の力で教材の問題を解く学習法で，「やればできる」という自己肯定感を育み，未知の領域にも自分から挑戦する力を培う。公文式は一人ひとりの「可能性の追求」を目指す教育である。

ちょうどの学習

子ども達を学年・年齢で見るのではなく，その子どもの能力に合わせて簡単に解ける問題からスモールステップで解いていき，少しずつ難易度を上げながら，高い学力と自分で学ぶ力を着実に身に付けるための学習。頭と心に適切な負荷のかかる「ちょうどの学習」を続けることで「やればできる」という自己肯定感と高い学力を身に付けるための学習。

一人ひとりの可能性を追求し，その能力を最大限に伸ばす学習法

目の前の学習者一人ひとりの可能性を信じ，その能力をさらに引き出す。一組の親子から生まれた公文式学習は，その創始者の想いを脈々と受け継ぎながら常によりよいものを求め続ける教材や指導法のたゆまぬ進化により，今や国境や人種，文化や習慣を越えて，世界中の国と地域に広がっている。

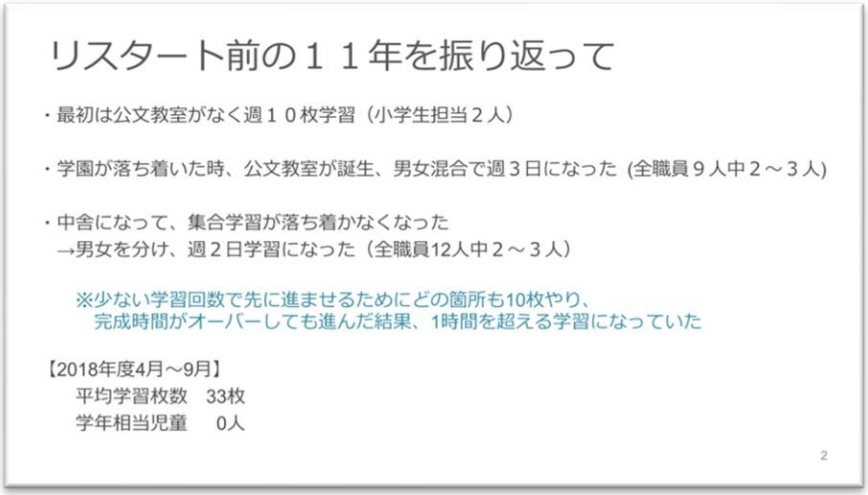


図１　リスタート前の１１年を振り返って

3　これまで（リスタート前）の公文（図１）

2018 年 10 月にこれまでの公文から新しい公文をスタート。これまでは公文専用の場所はなく，日常の生活空間で学校の宿題の延長として行なっていた。その後，公文専用の場所を作り男女混合で公文学習を行うこととなるが，普段別の棟で生活する異性と一緒に学習する状況に落ち着かない子ども達が多くなる。男女を分けて学習を行うこととなり，これまで週に３回だった学習が，週２回しかできなくなってしまった。また，学年に合わせた問題を与え，どれだけ時間が掛かって最後までやらせていたため，子ども達にとって「やらされ公文」になっており，意欲もなく集中できない子ども達が，公文時泣きながら解いていたり，なかには教材を破く子どももいた。注意をしても素直に切り替えることができず，職員も厳しく注意をしたり，対応に困ることも多々あった。「日課のなかに公文があることが負担だ」と思う職員も多かったと思う。子ども達にとっては，苦手な勉強に向き合わなければならず，ときには他児とトラブルになったり，職員に注意される時間となっていた。職員にとっては，ただでさえ業務に追われるなかで子ども達に公文をしっかりさせないといけないというプレッシャーや場にそぐわない言動をとる子ども，注意に反抗する子ども達の対応に苦慮する時間となっており，お互いに公文に対しマイナスなイメージが多かった。

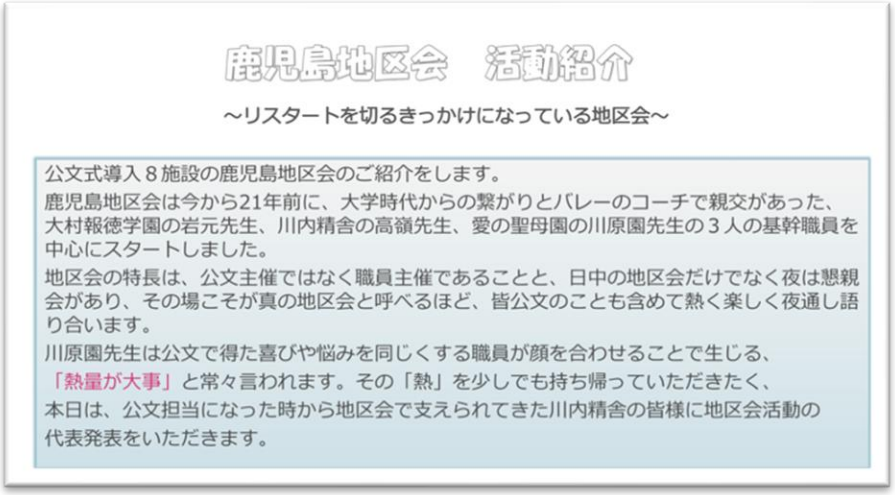


図２　鹿児島地区会

4　地区会の存在（図２　図３）

公文式を導入する児童養護施設の職員で作られた鹿児島地区会というものがある。元々親交のあった本園の職員と別施設の基幹的職員お二人を中心に始まった。その後，現在では児童養護施設だけでなく就労支援施設，放課後等デイサービス施設などの職員も参加している。公文の社員主催ではなく，導入施設の職員が主催で公文の指導のスキルアップや各施設の情報交換や悩みを相談するための研修会を行い，夜は懇親会で熱く語り合った。各施設学習状況やレベルは違っても，同じ悩みや公文学習で得た喜びを共有することで，公文担当者の熱量を高める場となっている。

そんな地区会のなかで学んだのが「公文＝褒める」というものであった。「学校にも行く。施設での生活の悩みもある。そんななかで公文学習に参加している。それだけで偉いこと，褒められるべきことではないか」そう話をされた先生の言葉にハッとさせられた。子ども達の基礎学力定着のためとはいえ，子ども達が希望してやっている公文ではないのに，ちゃんと時間には公文室へやってくる。確かにそれだけで褒められることであった。当たり前だと思っていることは，当たり前ではない，当たり前を当たり前にできることはすごいことなのだと気付いた。『公文の時間を子ども達に楽しいと思ってもらえるような時間にできないか，日常なかなかできない褒める場所にできないか』そう考えるようになった。

図３　地区会の様子

～キラキラシールの導入～（図４　図５）

地区会で学んだ「公文＝褒める」を本園の公文にも取り入れられないか，子ども達を褒め，認める場所にしていく方法はないかと考え，まずは子どもを褒める習慣をつけるため，子ども達がそれを実感できる方法をと思い「キラキラシール」という取り組みを始めることにした。

・その日の自分の教材が全て済んだら子ども達が好きな色のシール（カラーシール）を１枚貼る。

・学習終了時，職員がその日子どもが頑張った部分を認めるキラキラのシール（金色シール）を貼る。

・職員はほんの些細な部分でも良いため，子どもの良い部分を見付ける。

例：しっかり椅子に座れていたね。いつもより集中できたね等

Point

・成績や結果を褒めるのではなく「頑張ったこと」その過程を褒める。

・壁に準備した用紙にシールを貼ること，シールが積み重なっていくことで子ども達の頑張りや褒められた経験を見える化し，子ども自身が実感できるようにする。

・小さなことでも褒めて認めることで子ども達の自己肯定感を育てる公文を意識する。

図４　キラキラシール

図５　キラキラシール②

5　重点支援の提案（図６）

キラキラシールを始めた頃，公文の担当社員の方より重点支援の提案を受ける。

重点支援

・子ども達にちょうどの学習を与え，学年に追いつく，また越え続けていけるよう支援する。

・子ども達にちょうどの支援を行うため，定期的に（毎月 or 2 か月に 1 回）職員の勉強会と指導 OJT を受ける。

・これまで週 2 回だった学習を週 5 回以上確保するなどの条件をクリアする。

子ども達を褒め育てる公文にしたいと考えていたタイミングであったため，公文担当としては，ちょうどのが学習を提供することで，子ども達を育てていける，子ども達の自己肯定感を育てられる支援だと思い，重点支援を受けたいと思った。

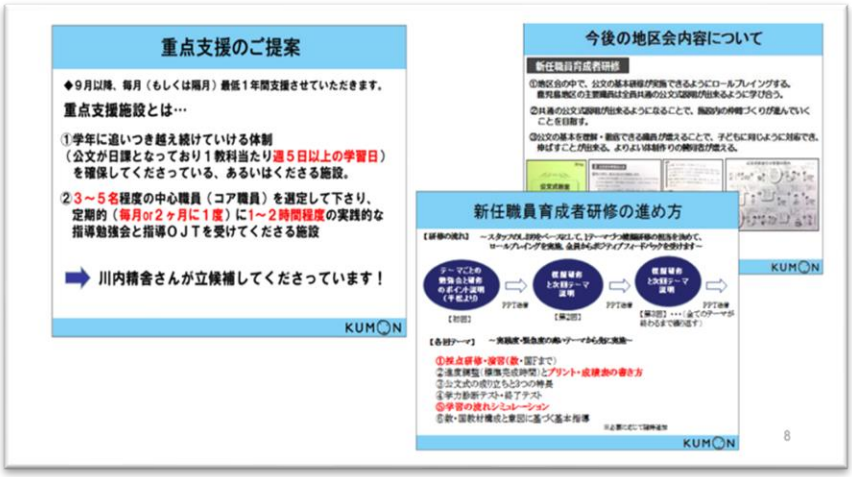


図６　重点支援

6　他職員との温度差

担当職員は願ってもないタイミングでの支援だと思っていたが，先に記したとおり公文学習が負担だと感じている職員もおり，そこにさらに学習日が増えることや，公文のための勉強時間を作ることの提案をすれば，さらに温度差ができることが予想された。そのため，他の職員からの理解を得るためにも，色々な準備を行なった。

7　重点支援開始準備

昨年10月からの主な変更点

ビフォー	アフター	何のため？
週２日学習 （夏休みは学習無し）	週５日学習 （夏休みも実施）	・毎日褒め育てるため ・定着、忘れないため ・量を確保し伸ばすため
長時間学習 （どの箇所も10枚） ※子どもも職員も嫌に	30分程度の短時間学習 （Ａまで10枚、Ｂ以降5枚） ※おかわり学習は可	・毎日継続するため ・最小時間で最大効果を出すため
2～3名の職員体制 ※特定の職員に負荷	3～4名の全職員体制（ｼﾌﾄ） ※短時間集中で負担も分散	・負担を分散させるため ・職員育成にするため
広すぎる学習室	適正な広さの専用教室	・動線をｺﾝﾊﾟｸﾄにするため ・集中力を高めるため
職員が成績表記入	子どもが自己記入	・自分の学習にするため ・振返り可能にするため
標準完成時間を オーバーしても進ませる	標準完成時間を目安にして、 進度調整する	・意欲の維持・向上のため ・「ちょうど」を褒めるため

図７　主な変更点

リスタートのため，次のような変更を行なった。（図７）

これまでは各棟ごとに週２回学習。また，学校のある平日のみのため，長期休みは公文学習は行っていなかった。しかし，ちょうどの教材を毎日少しづつ繰り返し定着を図ることや，毎日子どもを褒め育てることが大切であるため，週 5 回の学習（月・火・木・金・土 or 日）また，長期休みも公文学習を行うようにした。

どの箇所の教材も必ず 10 枚解かせ，子どもにも職員にも負担となる長時間学習となっていたが，最小時間で最大の効果を出すため，また，毎日継続していくために，教材によって枚数を 10 枚や 5 枚とそれぞれに分けて設定し，30 分程度の短時間学習になるようにした。

採点をする職員は学習を行う棟の職員が毎回 2 名で行っていたが，負担を分散させるため，また色々な職員が採点に入ることで職員のスキルアップを図るため 3～4 名の職員が採点に入るようにした。また，男女棟合同で行うことで，生活場面にいる職員の外に別の棟の職員や管理棟職員からも褒めてもらえる場とした。

リスタート前は大ホールに机を並べ学習を行っていた。しかし，広すぎるスペースで子ども達の集中力が続かず，ウロウロ歩き回ったり，暴れたりする原因となっていた。そのため，職員が会議で使用していた会議室に場所を変更した。（図８）そうすることで動線がコンパクトになり，集中力を高めることに繋がった。

図８　公文学習室

それから，成績表の記入についても変更を行なった。毎回学習後に個人の成績表に解いた教材の番号，解くのに掛かった時間，間違いを訂正する前の点数を記入するのだがこれをリスタート前は職員が行っていた。子ども達全員の採点を行い，その後成績表の記入をしていたため，棟へ戻るのが遅くなり，採点に入る職員も棟に残る職員も負担が大きくなっていた。リスタート後は成績表の記入は子ども自身に行わせることにした。職員の負担が減ったのは事実であるが，負担を減らすことが目的ではなく，そうすることで，子ども一人ひとりが「自分の学習」と捉えることを目的とした。また，毎回自身の成績を記入することでその日の学習の振り返りを行うことができ，これまでの成長を実感できる時間にした。これまで意識していなかった「標準完成時間」も意識して指導することにした。これまではどんなに解き終わるのに時間が掛かっても，どんどん教材を進ませていたが，リスタート後は標準完成時間を目安にして進度調整を行うようにした。そうすることで子ども達個々のちょうどの学習となり，褒める機会が増え，学習意欲の維持や向上に繋げた。

8　学習改革の手順

重点支援を基にした学習改革を行うため，次のような流れで学習改革を行なった。（図９）

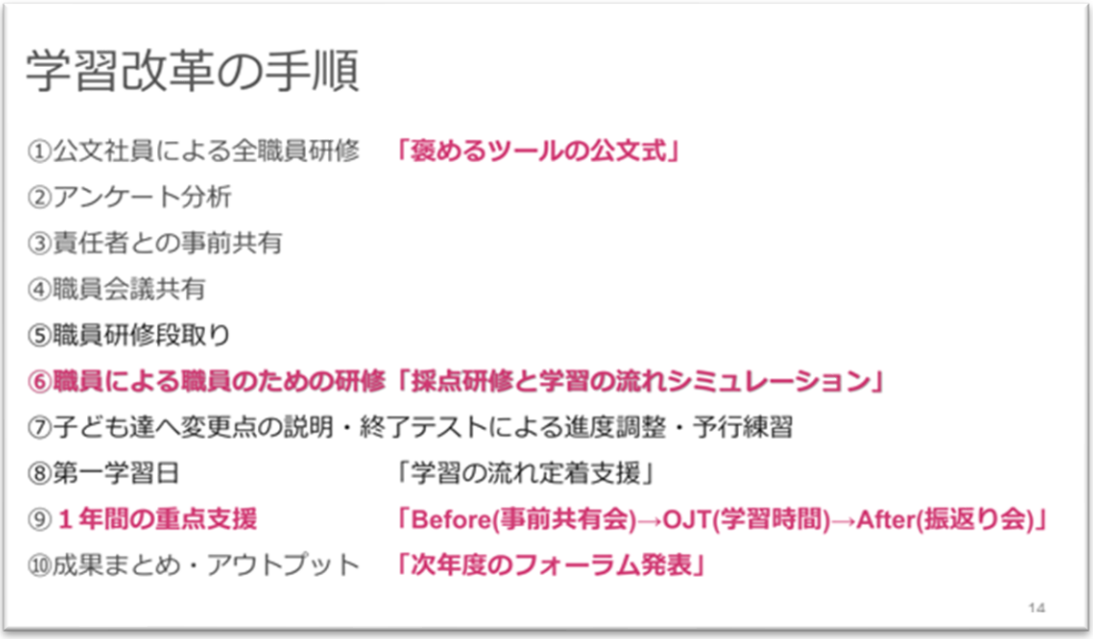


図９　学習改革の手順

① 公文社員による全職員研修（図 10）

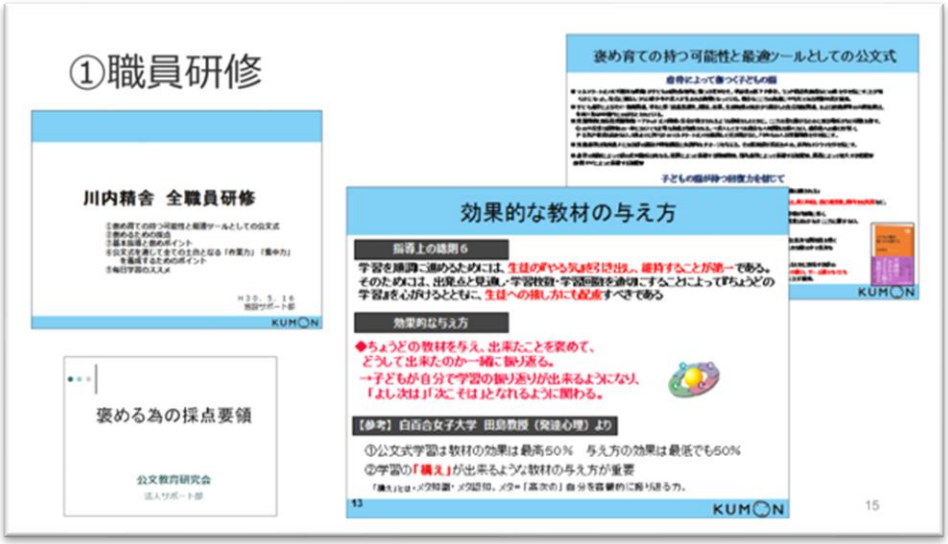


図 10　職員研修

公文の社員の方に来園していただき，職員に向け公文式とはなんなのか，どのような狙いがあるのかを説明していただいた。実際にすでに公文の採点に入っている職員がほとんどであったが，公文式の意図などを理解している職員は少なく，良い機会となった。また，その研修のなかで褒めるツールとしての公文の説明や重点支援の説明や提案をしていただき，公文担当職員以外にも重点支援について知ってもらう機会となった。

② アンケート分析（図 11）

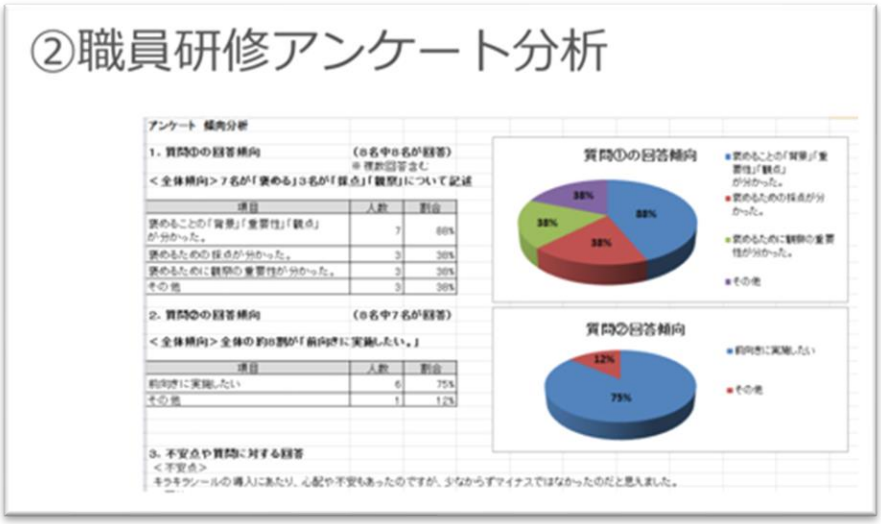


図 11　アンケート分析

全職員研修直後にアンケートを取り，褒めのツールとしての認識を図った。また，重点支援について前向きに検討したいという意見が多く見られた。子ども達を褒め育てたいという想いを共有する場にもなった。

③ 責任者との事前共有

公文の社員の方から重点支援について提案をいただく。その直後，公文担当職員の重点支援を受けたいという考えを副施設長に伝え，その都度報告・相談をし，自分たちの想いを伝え共有するようにしていた。

④ 職員会議共有

また，上席者への情報共有と合わせ，他職員にも職員会議等を利用し，アンケート結果はもちろん，子ども達を褒め，自己肯定感を育てたい想いを共有した。その後，重点支援を受けることを承認してもらい，全職員で取り組んでいくことが決まった。

⑤ 職員研修段取り

他職員に納得して協力してもらうため，子ども達を褒め育てるという取り組みが理想の話で終わらないために，環境設定や研修の準備など，細かい部分まで検討していき準備を進めた。

⑥ 職員による職員のための研修（図 12）

図 12　職員のための研修

これまでも公文の採点をどの職員も行なってはいたが，丸の付け方や点数の書き方など，採点の方法や学習の流れが大きく変わるため，職員を２つのグループに分け，採点者役と子ども役をどちらも経験してもらう学習シミュレーションを含んだ研修を行なった。これまでの採点とは違う意識で行って欲しいこと，公文時は子どもを褒め，認め育てることを意識して欲しいこと，採点のポイントや変更点などを伝えた。

Point

採点は子どもとのコミュニケーション

公文式は学校のテストや宿題の採点（丸つけ）とは意味が異なる。学校の採点が間違いを見つけるもの，チェックのための採点であるのに対し，公文の採点は①褒めるため②伸ばすため（指導の）ために行う採点である。「ここが間違ってるよ」ではなく「こんなに丸（正解）があったよ」という意味で採点を行うことを意識している。丸付けは1問1問は行わない。しかし，片面の問題全てが正解だった際大きな丁寧な丸を書く。また，両面全て正解だった場合は大きな丸の中に大きな「100」を書くようにしている。（図 13）子どもに「よくできたね」「すごいね」「頑張ったね」という気持ちを込め，会話はなくともその気持ちが伝わるように大きく丁寧な採点を心がける。逆に 100 点以外の点数や間違いのチェックはできるだけ小さく書いたり（図 14），75 点以下は記入しないようにするなど（図 15），子ども達の意欲や自信を損なわないように気を付ける。職員の丁寧な採点が子ども達にとって「褒められた」「自分のことを見て貰えている」という気持ちに繋がる。

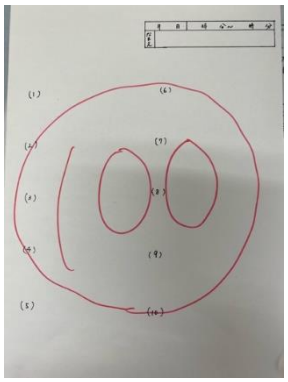


図 13　採点①

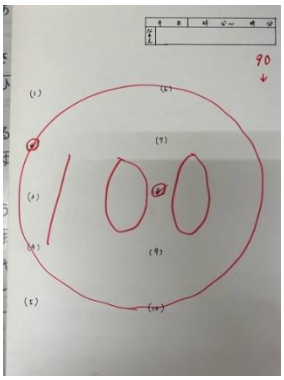


図 14　採点②

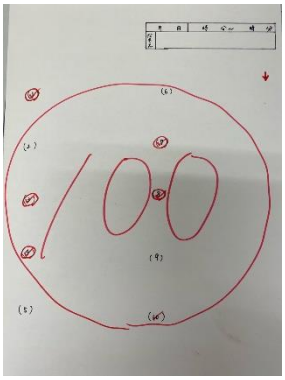


図 15　採点③

採点の基本は守りつつ，職員それぞれが工夫も行い「パーフェクトだよ」「よく頑張ってるね」「よく理解できてるね」などメッセージを書き込んだり，「100」に顔やイラストを書いて返却することもある。（図 16）些細なやりとりではあるが，採点後のプリントを確認した子ども達もより嬉しそうな表情を見せる。また，そのコメントを復唱するように「僕，頑張ったね」「私，できてるよね」と口にし自信が積み重なっていっている。

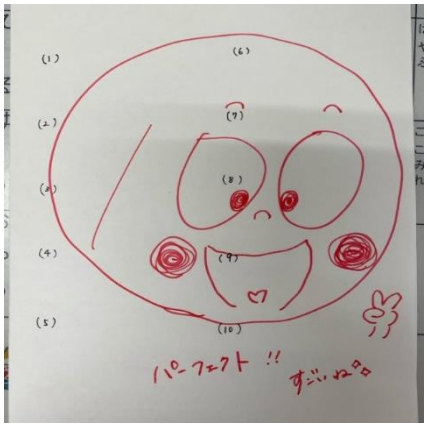


図 16　採点④

⑦ 子ども達への変更点の説明・終了テストによる進度調整・予行練習（図 17）

図 17　子ども達への説明

今回の学習改革では子ども達にとっても大きな変化となった。そのため，リスタート前に子ども達にも時間を作ってもらい説明会を行なった。また，終了テストを利用し子ども達の学年に合わせた学習ではなく，子ども一人ひとりの今の能力に合わせた「ちょうどの学習」となるよう進度の調整を行なった。その後，新しく始まる自身での成績表の記入や新しい学習の流れなどの説明をした後，予行練習を行なった。説明を聞くだけでは理解できない子どもも多いため，実際の教室，実際の教具を使い，動きを体験したことが，リスタート初日，新しい学習スタイルへのスムーズな変動に効果的だったと思う。

⑧ 第一学習日

予行練習の甲斐もあり，子ども達はスムーズに新しい学習スタイルに対応していた。これまで騒がしかった教室はシーンと静まり，スタートの合図と共に問題を解く子ども達の絵鉛筆の音だけが響いていた。私語が多く，分からないと嘆く子どもの声や，ふざけて場の空気を崩してしまう子どもの言動，それを注意する職員の声，ときには教材を破り癇癪を起こす児どもがいたこれまでの公文の時間とは全く違う状況に感動したことを今でも鮮明に記憶している。改革と言えるほどの大きな変更に本当にリスタートを切れるのか，子ども達はついてきてくれるのかなど，大きな不安を抱えながら準備を進めてきた時間と覚悟が「間違っていなかった」と証明されたように感じたと共に，どんなことも，しっかりとした準備が大事なのだと再認識させられた第一学習日であった。

⑨ 一年間の重点支援

重点支援を受ける１年間は毎月１回以上，社員の方が来園してくださり，「Before（事前共有会）→OJT（学習時間）→After（振返り会）」を基本とし，学習支援・運営支援を行ってくださった。（図 18）

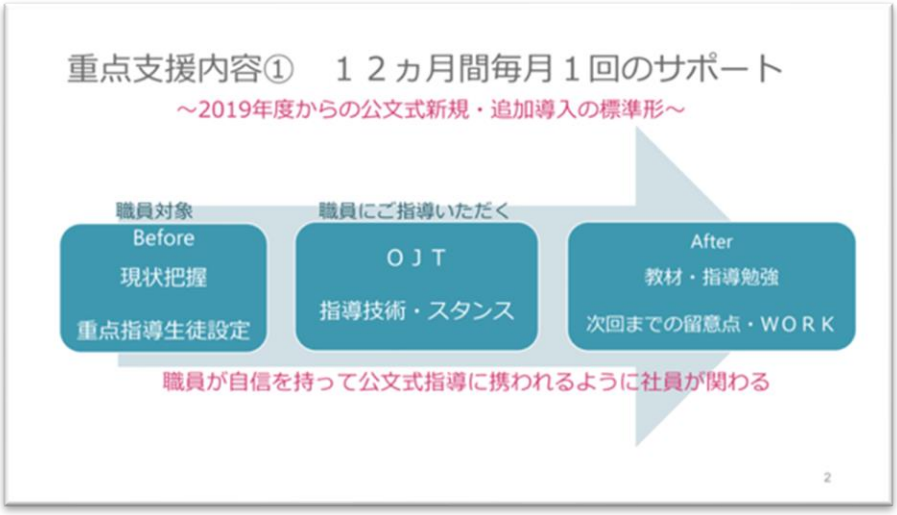


図 18　重点支援①

Before（事前共有会）

来園していただいた際は，先ず前回以降の子ども達の進度の確認や学習状況（取り組みの態度や指導したこと，つまづきや職員が気になった部分）の情報共有を行う。それを踏まえ，学習時間見学時どの児童にどのような指導を行うのがいいか，指導の方法やポイントを教えていただく。

OJT（学習時間）

事前共有会で教えていただいたことを実践する。子ども達を伸ばしていくための具体的な声の掛け方や効果的なタイミング，子どもの力の引き出し方を直前で学び，その後すぐに実践し職員のスキルアップに繋げる（図 19）。社員の方には，子ども達の学習・職員の指導の両面を見ていただき，学習後更にアドバイスをいただく。

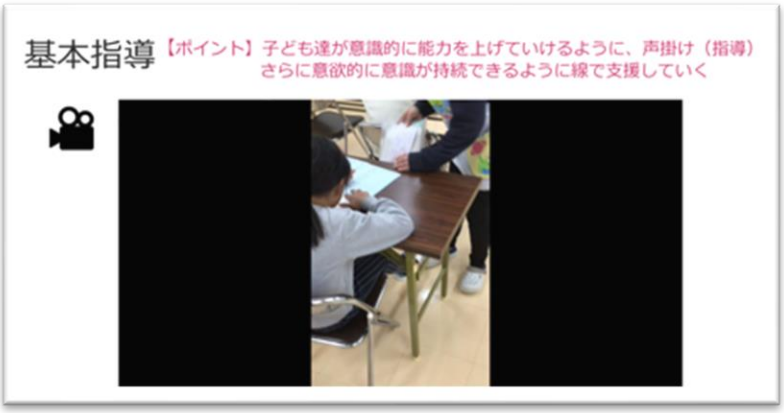


図 19　指導の実践

After（振返り会）

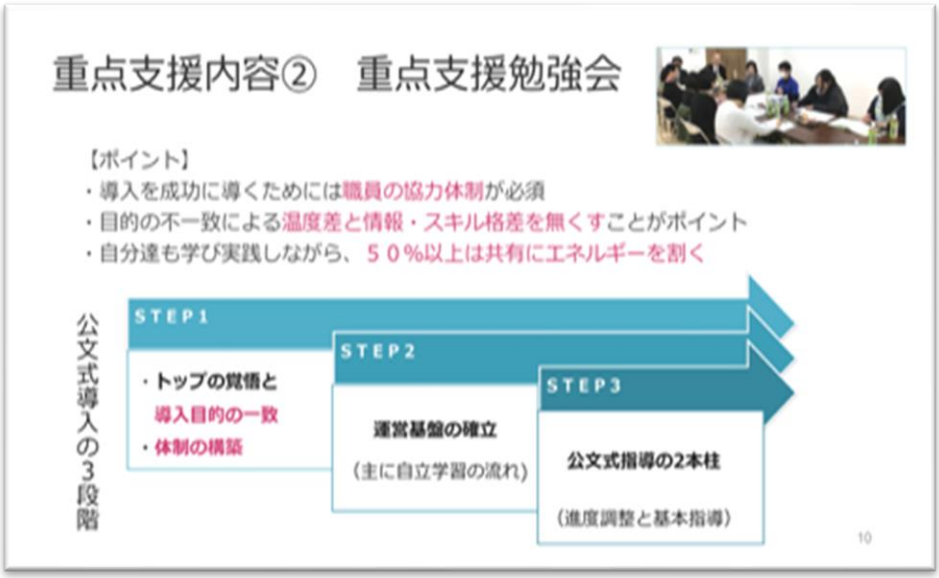


図 20　重点支援勉強会①

次の日約 2 時間ほどの勉強会を行っていただく（図 20）。子ども達の解いている教材がどのような意図で作られているのか，教材の内容・仕組み，どのような指導方法が適切か，学習進度はどのように見立てて行けば良いか等を学んだ。（図 21 図 22）
どうしても毎回全職員が勉強会に参加できるわけではないため，学んだことを職員用の運営のための教材に書き込んだり，ノートにまとめコピーしたものを毎回職員へ配ったり，毎月の職員会議で情報を共有した。（図 23）

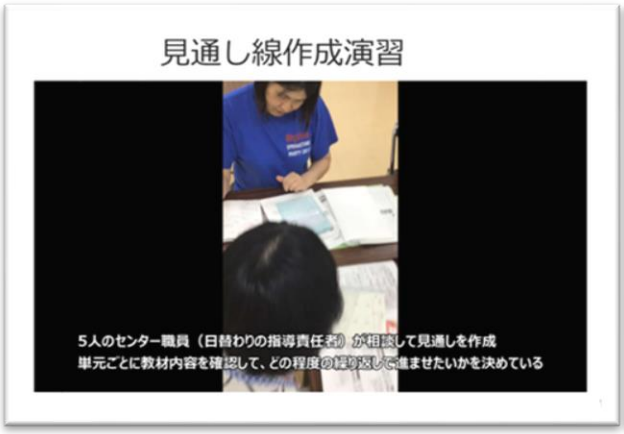


図 21　重点支援勉強会②

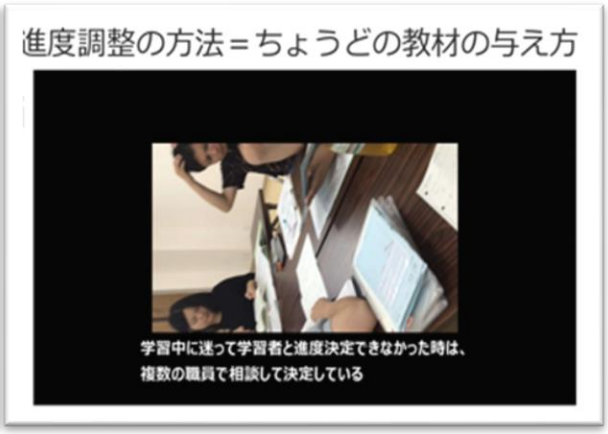


図 22　重点支援勉強会③

図 23　重点支援勉強会④

PDCA サイクルの定着

社員の方からいただいたアドバイスや振返り会で学んだことを生かし，子ども達に PDCA（plan→do→check→act）サイクルを育ませた。

Before→前回の学習を振り返り今日の目標を決めたり，学習のポイントを確認し自ら意識して取り組めるようにする。

学習時→確認したことを意識して学習に取り組む。

例：完成時間の目標，解くテンポ，字の大きさ，部分訂正，繰り上がりや繰り下がりを書かない（暗算）など

After→職員とのフィードバックを通し職員から良かったこと，できたことを褒めて貰う。そうすることで自分の「できた」を実感する。その「できた」がなぜできたのかを考える。そうすることで解き方や理解の定着となる。また，自身を客観的に振り返ることができるようになり，「自分はできる」という自己肯定感の構築に繋がる。フィードバックで振り返ったことを含め次回の学習の進度や目標や学習のポイントを決める。

これを繰り返すことで PDCA サイクルが定着し，子ども達が自分自身で成長していく方法を学び，実践してさらなる成長に繋がった。

重点支援を受けるなかで生まれた工夫

重点支援を受けるなかで学ぶだけでなく，工夫も生まれてきた。子ども達を褒め育てていくため，全職員で同じ基準で支援できるよう特に情報共有に力を入れた。

応援ポケット（図 24）

子ども達に学習時意識してほしいことや，解く前の導入の言葉掛け，意欲的に学習に取り組めるような言葉をカードに書いて自作したポケットに入れて，学習前に子どもが目にして意識できるようにした。また，それと同時に職員もそれを見て子どもの状況，支援のポイントを把握できるため，引き継ぎノートの代わりとしても使用した。

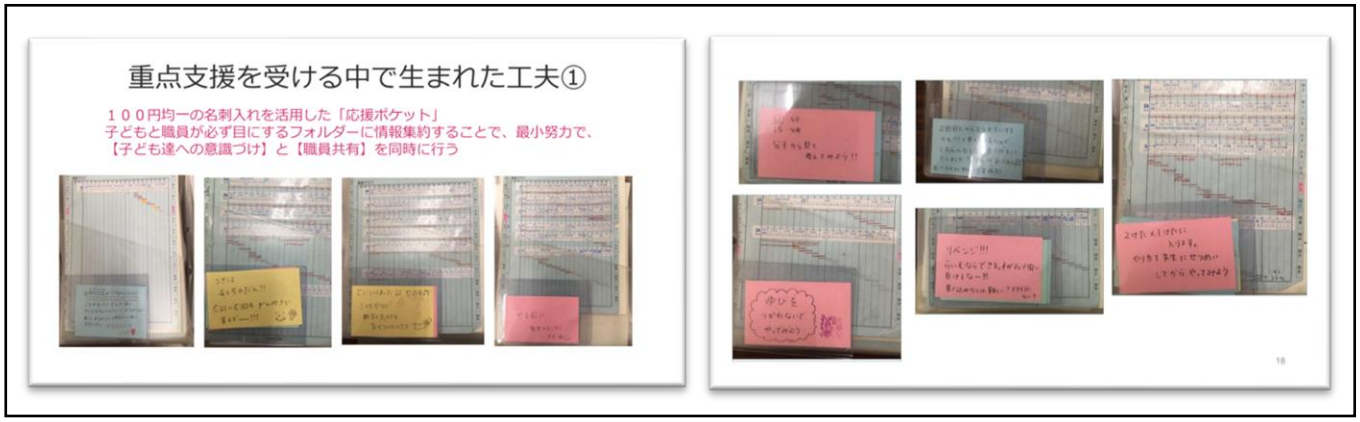


図 24　応援ポケット

オレンジステップ

子ども達の能力や学習態度，実際の状況などを照らしわせて，見通しを立てる。子ども達の成績表に，立てた見通しに合わせ，教材の復習回数など鉛筆で線を記入する。子ども達が実際には見通しを超えてきた際，鉛筆の線を消して見通しを引き直すのではなく，あえてオレンジの蛍光ペンでなぞり，線を目立たせ「見える化」をする。子ども達が「先生達の予想を超えてできた！」と喜び，更に意欲的に取り組むようになった。（図 25）

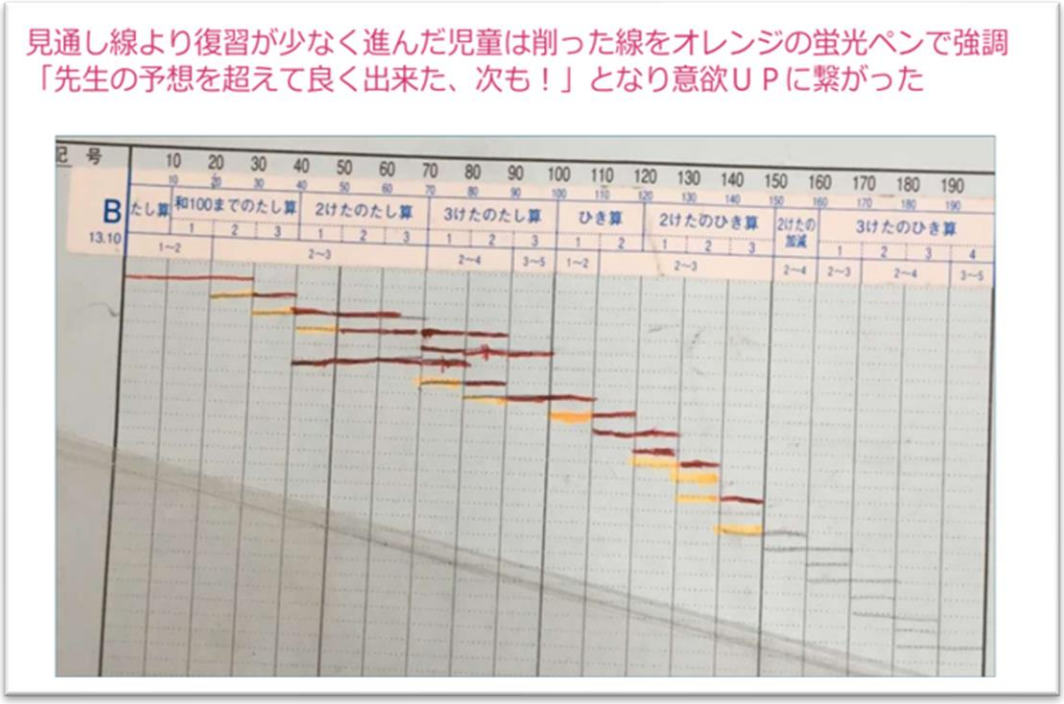


図 25　オレンジステップ

⑩ 成果のまとめ・アウトプット

1 年間の重点支援の成果や子ども達の頑張り，自分たちの取り組みなどを大阪で行われた「公文式導入施設フォーラム」で発表した（2020.1）また，その後も Zoom を利用し全国の公文導入施設を対象とした研修 KST（Kumon Study Tour）で，重点支援の成果とその後について発表し（2021.2），参加施設から好評をいただいている。

9　もう一つの目的

このように子ども達にちょうどの学習を提供することで，小さな成功体験を積み重ね，できたことを褒めて認めて，結果ではなく向き合った過程を褒めて認めて，それを毎日のように繰り返し，子ども達の自己肯定感を育むことを目的として行なった重点支援。それにはもう一つの目的があった。それは職員の褒める力のスキルアップである。

どうしても日常生活のなかでは，子ども達を褒めることが少なくなってしまう現状がある。子ども達のできていない部分を注意するが，できている部分は「当たり前」と褒めるきっかけを見逃してしまっていたり，その子ども自身を見るのではなく，年齢や学年，周りとの差で見てしまいがちである。探せば褒めるべき出来事はたくさんあるが，それをせずにいる職員の褒める力を育てる，そのような視点で物事を見る力をつけるために公文の重点支援を使おうというものであった。

公文時，意識して子ども達を褒める経験を積み重ね，そこから日常でも同じような視点で支援ができるように，職員に「褒めのスペシャリスト」になって欲しいという上席者や公文担当職員の願いも込められていた。そこが全職員での公文学習支援にこだわっている１つの理由でもある。

図 26　重点支援 After

学習改革を行いリスタートから１年以上が過ぎても，ちょうどの教材を提供することを心がけ，できたことを全職員で褒め続けた結果，子ども達一人ひとりが自分の学習に向き合うようになり，学習室には鉛筆の音だけが響いていた。(図 26)

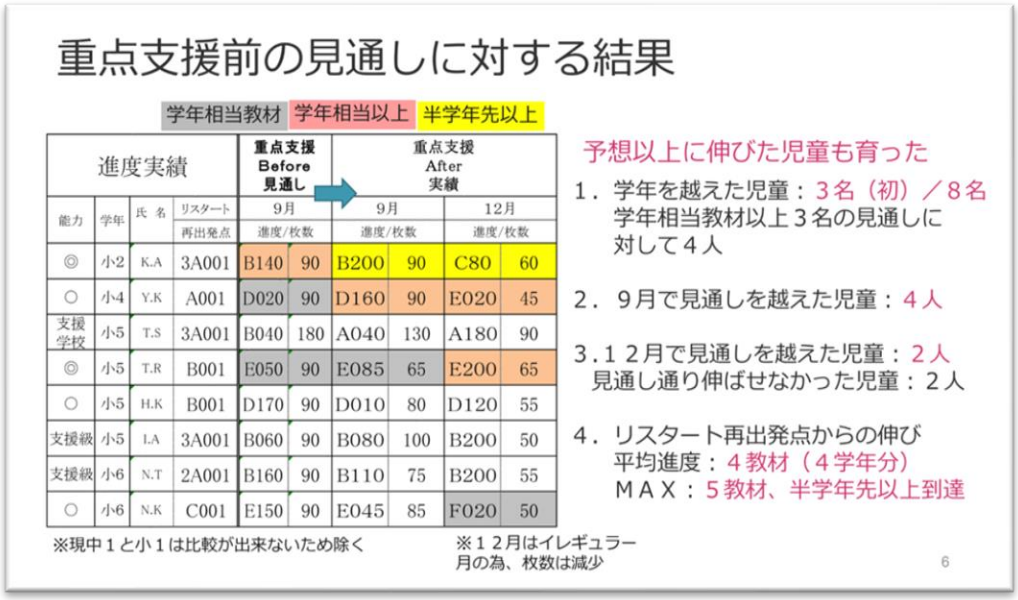
10　重点支援 After（全体変化）

① こうすれば学力は自然とついてくることがわかった。

学力をつけようと思っていたときは思うようにつかなくて，褒めるためにやったら思いのほか学力がついた。

② 初めて学年を超える子どもが出てきた

導入 11 年間 1 人も学年を超えていなかったが，3 名の子どもが学年を超えた（R 2 年度）。（図 27）



重点支援前の見通しに対する結果

学年相当教材　学年相当以上　半学年先以上

進度実績				重点支援 Before 見通し		重点支援 After 実績			
能力	学年	氏名	リスタート	9月		9月		12月	
			再出発点	進度/枚数		進度/枚数		進度/枚数	
◎	小2	K.A	3A001	B140	90	B200	90	C80	60
○	小4	Y.K	A001	D020	90	D160	90	E020	45
支援学校	小5	T.S	3A001	B040	180	A040	130	A180	90
◎	小5	T.R	B001	E050	90	E085	65	E200	65
○	小5	H.K	B001	D170	90	D010	80	D120	55
支援級	小5	I.A	3A001	B060	90	B080	100	B200	50
支援級	小6	N.T	2A001	B160	90	B110	75	B200	55
○	小6	N.K	C001	E150	90	E045	85	F020	50

※現中１と小１は比較が出来ないため除く

※１２月はイレギュラー月の為、枚数は減少

予想以上に伸びた児童も育った

1．学年を越えた児童：３名（初）／８名
学年相当教材以上３名の見通しに対して４人

2．９月で見通しを越えた児童：４人

3．１２月で見通しを越えた児童：２人
見通し通り伸ばせなかった児童：２人

4．リスタート再出発点からの伸び
平均進度：４教材（４学年分）
ＭＡＸ：５教材、半学年先以上到達

6

図 27　見通しに対する結果

③ 職員が変わった

小さな変化を見逃さなくなった。

褒め方が自然となり，より具体的に褒めることができるようになった。

公文で意識した褒めることが，日常生活支援のなかにも反映されるようになった。

④ 子ども達が変わった

以前は長時間苦戦してなかなか取り掛かれなかった学校の宿題がすぐに終わるようになった。

勉強に苦手意識を持つ子どもが多かったが「公文できるよ」「算数好き」と自信を持って言えるようになった。

公文で時間を意識して取り組むようになったことで，生活場面で時間を意識して行動したり，行動の見立てを立てることができるようになった。

目標を持つことができるようになった。また，それを表現できるようになった。

わたしがチャレンジしていること

わたしが、四年生になってチャレンジしていることが、二つあります。

小学校　四年　Y・K

一つ目は、くもんの分数のたし算にチャレンジしています。なん問かまちがいもあるけどまちがえなおしを自分の力でがんばってすることを目標としてがんばっていきたいです。

次からは分数のかけ算にはいっていくのでこしずつ、すすんでいくにつれて、まちがえも、へらしていきたいです。

二つ目は、宿題をじぶんの力でとくことにチャレンジしています。わたしはすこしずつむずかしくなっていくので、「自分の力」ということを目標としてがんばっていきたいです。

これからは、くもんも宿題もむずかしくなっていくのでこれからも「自分の力」を大切にしてまたいろいろなことにチャレンジしていきたいと思います。

20×20

図 28　子どもとともに

当時小学 4 年生の女の子が「子どもとともに」（鹿児島県児童養護協議会が発行する入所児童や施設職員の文集）のために書いた作文。（図 28）職員がテーマを指定したのではなく，この子自身が「チャレンジしていること」とテーマを決め，公文について書いていた。自信を持って「チャレンジしています」と子どもが自分で言えるようになってきたのは大きな変化となった。また，「自分の力でやる」ということがリスタートした公文学習で定着したことの 1 つであり，この子のなかで公文だけでなく，学校の宿題等でも目標として取り組むようになった。

11　リスタート後の変化について，更に具体的に，2 つの事例をもとに振り返る

生活支援と学習支援は自立支援の両輪だと考えている。この考えは児童養護施設だけに適応する考えではなく，就労支援や療育にも適応すると考える。（図 29）

図 29　自立支援の両輪

図 30　ケース N.T

ケース：N．Ｔ君（当時小 6）（図 30 図 31）

日常から落ち着きがなく，じっと座っていることができない。また，特に環境の変化が苦手で，新しい環境や特別な行事・場所となるとソワソワ落ち着けず動き回ったり，勝手に人の物を触ったりしてしまう。勉強に対しても苦手意識が強く，特に算数（計算）が苦手で宿題にかなりの時間を要しており，消灯時間を過ぎても取り組んでいる日もあった。小 6 であるが，足し算に苦戦しており，指を使っている状況であった。

そのため，足し算の定着を図れるようその部分の復習を繰り返す支援を行った。また，指を使わず計算できるようになるため，暗算の定着と徹底を行った。（図 32）

図 31　課題（N.T）

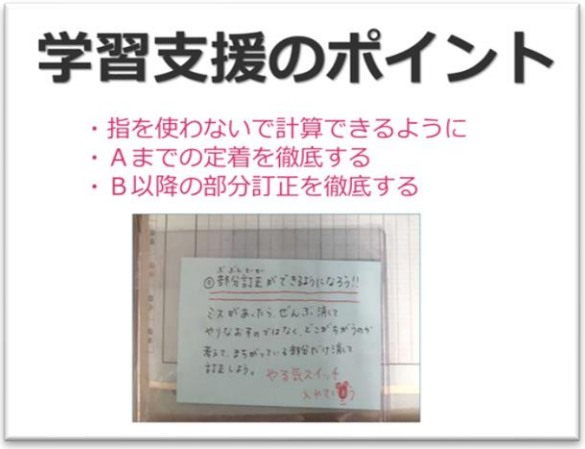


図 32　支援のポイント（N.T）

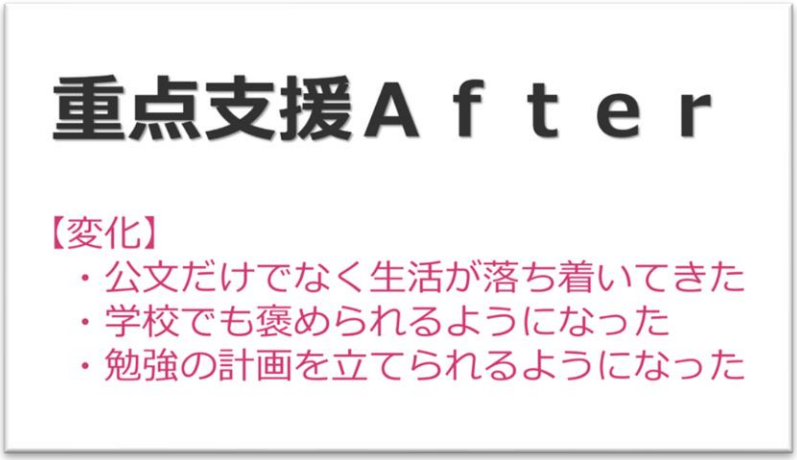


図 33　変化（N.T）

「できる」を積み重ね公文を楽しめるようになった。以前は採点を待つ間席に座って待つことができず，注意を受けることが多かったＴ君であるが，誰よりも静かに読書をすることができるようになった。また，落ち着いた生活は，園内だけではなく学校でも現れてきた。通級する支援学級の下級生に計算を教えるようになったと担任より話がある。自分のことで精一杯だったＴ君が周りを気にして，苦手で指を使わないとできなかった計算を下級生に教える，そのことを担任や下級生の保護者から感謝されるまでになったのだ。

また，消灯時間まで掛かっていた宿題もスラスラ解けるようになった。夕方までに宿題を済ませられるよう計画して取り組めるようになった。（図 33 図 34）

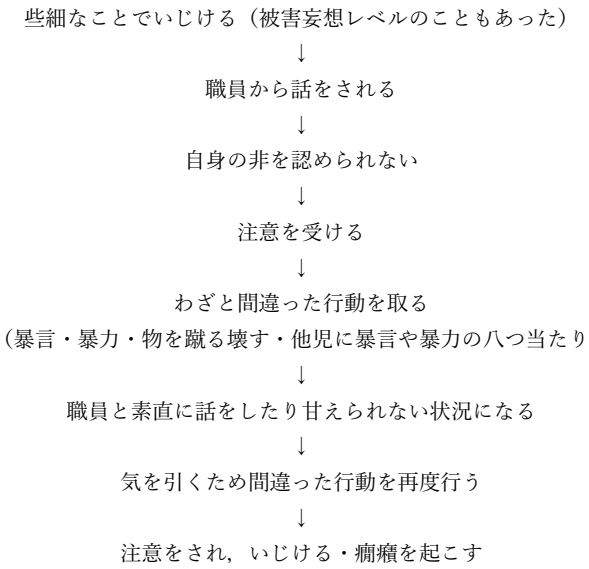
図 34　読書をする様子

図 35　ケース（T.R）

ケース：T．R さん（当時小 5）(図 35)

自分に自信がなく，本当に些細なことでもいじけ，そこからなかなか切り替えられず，そのまま一日を過ごすこともあった。また，そこから癇癪を起こすことも多く，１日に２～３回の癇癪，それが毎日あるような状況であった。このような状況もありコンサータを服用していたが，なかなか状況は変わらずにいた。また，夜尿も毎日のようにある状況であった。

職員から注意を受けることが多く，そこからさらに間違った行動を取り，また注意を受けるというような悪循環が起きていた。



このような悪循環の毎日に，どうすればいいのか，職員も R さん自身も困惑していた。

（図 36）

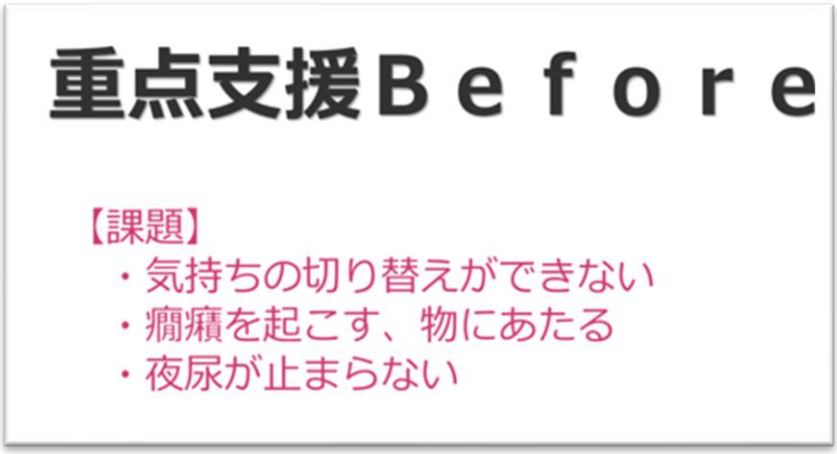


図 36 課題（T.R）

図 37　支援のポイント（T.R）

目に見える形でハッキリとした目標提示を行うことで，目標を持てるように，またそうすることで，クリアした際に目標を達成したと実感しやすくし成功体験となるようにした。

また，普通は公文学習の支援に母親や家族が入ることはないのだが，R ちゃんの心の一番奥の「お母さんに自分のことを見てほしい」「愛して欲しい」という気持ち。でも遠慮して本心は言えない。お母さんからは「R ちゃんとどう接していいか分からない…」と相談を受ける。母子関係に溝がある状況から，R ちゃんの自己肯定感を育むためには必要不可欠だと判断し，そこにポイントを当てた。(図 37)

Ｒちゃんと目標を決め，見える化し，それをＲちゃんにとってキーパーソンとなる職員に協力してもらい，母親に電話でお伝えした。Ｒちゃんが公文で頑張っていることをその後も学校行事の連絡の電話や面会時など，母親と話をするタイミングがある度にお伝えした。更に母親にＲちゃんの公文を応援していただけないか，そうすればもっとＲちゃんが頑張れると思うことをお伝えし，協力を依頼した。また，その応援が「見える」ために手紙にしていただいた。(図 38) そして，公文担当職員からＲちゃんに手紙を渡し，母親もＲちゃんの頑張りを喜んでいること，応援していることを伝えた。手紙を見て，話を聞き母親の想いに触れたＲちゃんは，ニコニコ恥ずかしそうな照れ笑いを見せながら喜んでいた。

図 38　母親からの手紙

図 39　変化（T.R）

公文でちょうどの学習を通し「できる」経験を積み重ね，その度にプラスの言葉のシャワーを浴び，母親や職員から頑張っていると認められる日々が続き，影響は日常生活にも出始めた。(図 39)嫌なことがあり，いじけことはあっても，切り替えるまでの時間が掛からなくなった。また，あんなに起こしていた癇癪の頻度も大幅に減り，職員や母

親の大人からだけではなく，他の子ども達からも「R ちゃん暴れなくなったよね」と認められるほどあった。癇癪を起こせばいつも最終的に「どうせ私なんか」と言っていたが R ちゃん。頑張れていることがあっても，その後癇癪を起こしてしまえば「もう意味がない」「ゼロに戻った」「私はダメなんだ」と言っていた R ちゃんであるが「失敗してもまた頑張ればいいんだ」と自分の失敗も受け入れられるように，またそれを表現できるようになった。自分の失敗を受け入れられる，自分のマイナスな部分も認めそこから更に前を向けるようになったのも，公文で計算を間違っても自力でどこが間違っているか見つけ出し正解を導き出す，失敗してもやり直せる経験を積んだからではないだろうか。間違っても，そこまでの過程，頑張りを褒めてもらえる。それは「褒める公文」になったからこそである。また，重点支援を通し，職員が生活場面でも褒めの意識を持つようになったからこそ，そして何より，R ちゃん自身が頑張ったからこそ育まれた自己肯定感の表れだと思う。「自分はできる」という気持ちはもちろん「失敗しても大丈夫」と思えることは，自己肯定感が育まれた証拠である。

R ちゃん自身も自分の変化を体感しており，それが作文にも表れている。（図 40 図 41 図 42）自分のことを受け止めてもらえる，そんな公文の時間が大好きになった。自信を持って取り組めるようになり，更に意欲的に取り組めるようになり，ついには学年を超えた教材に進めるようになった。

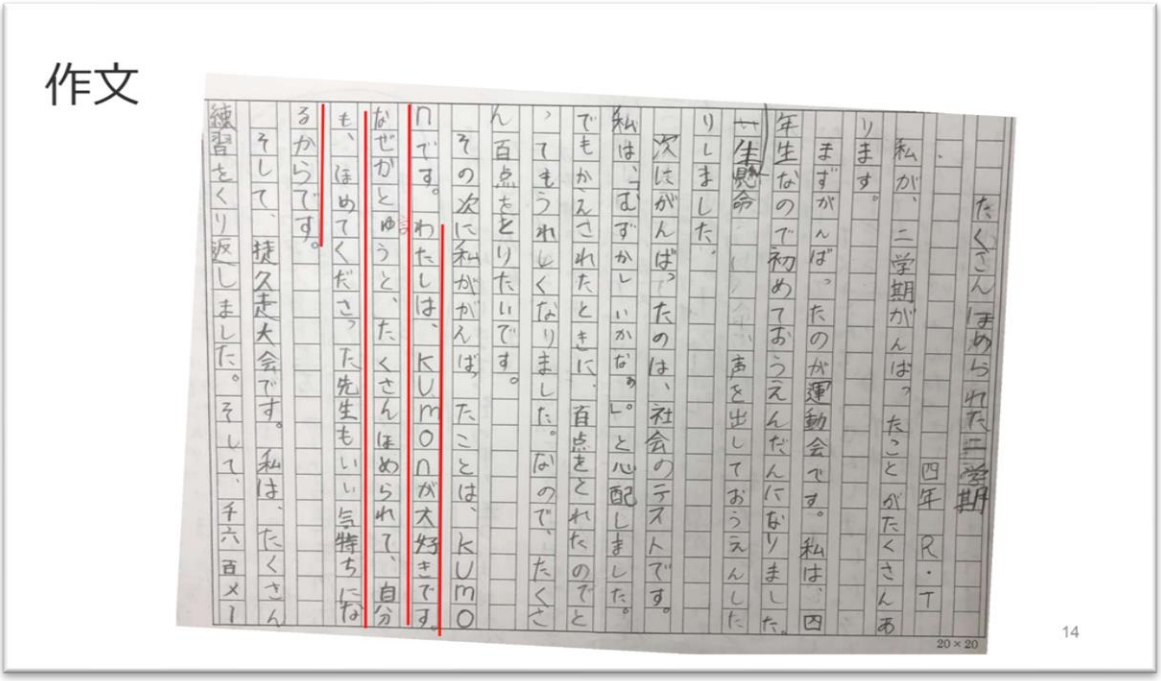
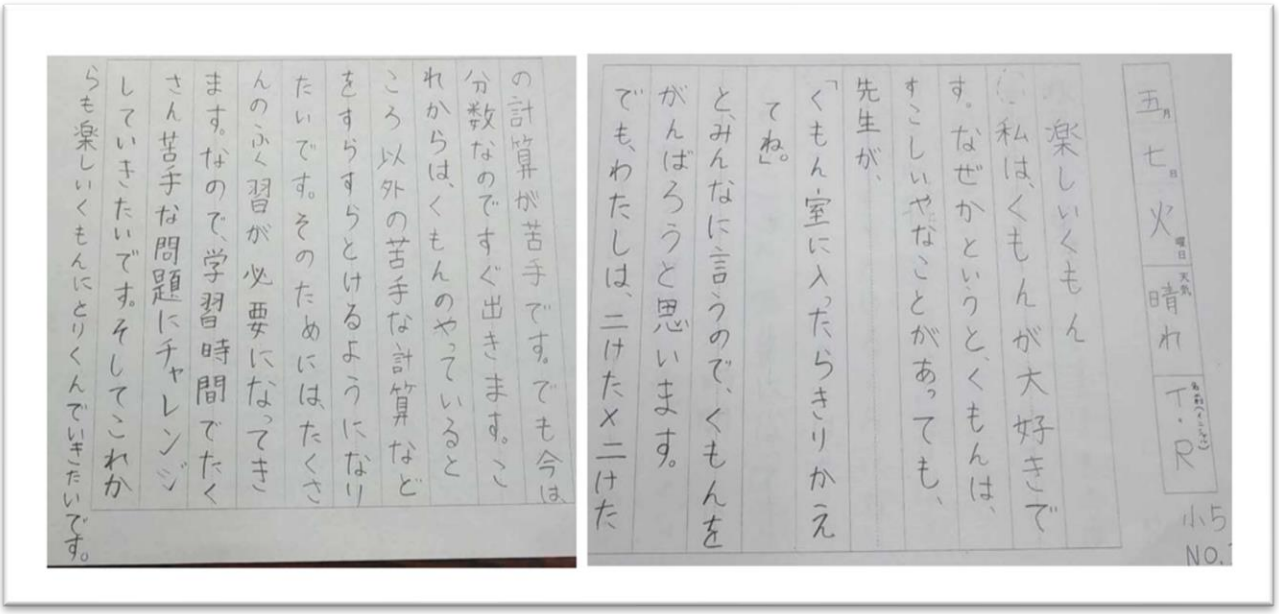


図 40　作文①

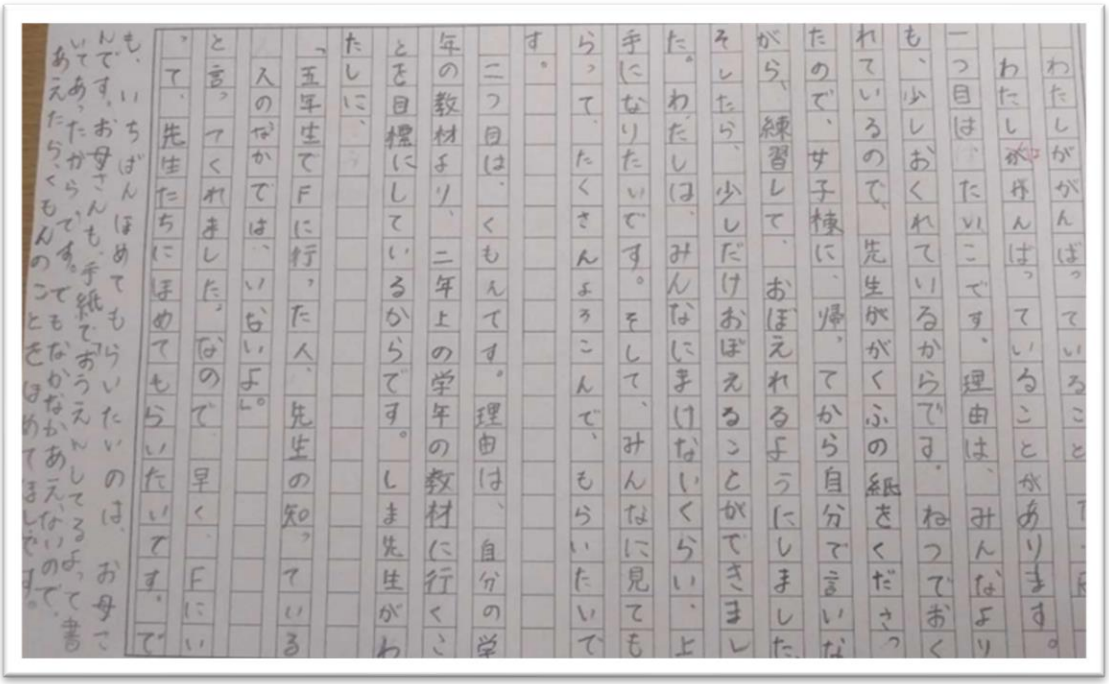


五月七日 火曜日 天気 晴れ T・R

楽しいくもん

私は、くもんが大好きです。なぜかというと、くもんは、すこしいやなことがあっても、先生が、「くもん室に入ったらきりかえてね。」と、みんなに言うので、くもんをがんばろうと思います。でも、わたしは、二けたx二けたの計算が苦手です。でも今は分数なのですぐ出きます。これからは、くもんのやっているところ以外の苦手な計算などをすらすらとけるようになりたいです。そのためには、たくさんのふく習が必要になってきます。なので、学習時間でたくさん苦手な問題にチャレンジしていきたいです。そしてこれからも楽しいくもんにとりくんでいきたいです。

図 41　作文②



わたしががんばっていることは、わたしががんばっていることがあります。一つ目は、たいこです。理由は、みんなよりも、少しおくれているからです。ねつでおくれているので、先生ががくふの紙をくださったので、サ子様に、帰ってから自分で言いながら、練習して、おぼえるようにしました。そしたら、少しだけおぼえることができました。わたしは、みんなにまけないくらい、上手になりたいです。そして、みんなに見てもらって、たくさんよろこんで、もらいたいです。

二つ目は、くもんです。理由は、自分の学年の教材より、二年上の学年の教材に行くことを目標にしているからです。しま先生がわたしに、「五年生でFに行った人、先生の知っている人のなかでは、いないよ。」と言ってくれました。なので、早く、Fにいって、先生たちにほめてもらいたいです。でも、いちばんほめてもらいたいのは、お母さんです。お母さんも、手紙でおうえんしてるよって書いてあったからです。でもなかなかあえないので、あえたら、くもんのことをほめてもらいたいです。

図 42　作文③

事例に挙げた２名の子ども達だけではなく，全ての子ども達が公文に意欲的に取り組めるようになった。「公文楽しい」と言ってくれるようになっていた。毎日の積み重ねが，子ども一人ひとりの集中力と学習意欲を高め，計算力や学習習慣の定着となった。

12　まとめ

「子ども達の自己肯定感を育む学習支援」をテーマに，2018 年公文の重点支援を基に学習改革を行ってきた。重点支援が終わったことで，学習改革も終わりを迎える訳ではなく，その後も職員間で常に子どもの状況を共有し，必要に応じてどのような支援方法が適切か検討するなど，現在も全職員でスキル向上に努めている。
リスタートを切ったときのスタイルを今でも崩すことなく，また，少しずつ日々進化しながら子ども達の公文学習は行われている。全職員で向き合ったからこその現状である。そして何より子ども達の頑張りがあってこその現状であり，子ども達がこんなに成長し嬉しい限りである。

「子ども達の自己肯定感を育てたい」「楽しい公文にしたい」「子ども達を褒め育てたい」そんな思いから始めた公文学習の学習改革。重点支援を通し，子どもも職員もスキルアップした。集中力も学力も低い子ども達，自己肯定感が低い，もっと言えば自己肯定感がないと言えるような状態だった子ども達。そんな子ども達に必要なのは毎日の「プラスの言葉のシャワー」であった。自己肯定感を育ませることで，公文だけでなく，日常生活・学校生活へと可能性は広がり，さらに子ども達が夢や目標を持つことができるようになったのだ。いろんな経験をし，いろんな傷を心に負って施設へやって来た子ども達。ほんの些細なことでも認め，褒めることが子ども達の可能性を広げるために職員にできる小さくて大きな支援に繋がるのではないだろうか。